

## 『ロンドン』の注釈の試み

——ユウェナリスの第三風刺詩を対照にして——

志 賀 文 枝

ジョンソン (Samuel Johnson) の『ロンドン』 (*London*, 1738) は、ローマ時代の詩人、ユウェナリス (Deci Junius Juvenalis) の第三風刺詩 (*Satva III, The Third Satire*) の構想を模倣し、当時の London の世相を諷刺したものである。

### 序

何故ジョンソンは、ユウェナリスの風刺詩を模倣したのだろうか。

当時の英国の文学界は、Pope をはじめいろいろな詩人がギリシア、ローマの古典を下敷きに、詩作をするのが、創作詩と同等の評価を得て流行していた。しかしジョンソンの『ロンドン』は、単なる形式上の模倣にとどまるものではなかった。そこには、ユウェナリスの生きたローマとジョンソンの生きたロンドンが持つ「都市性」という共通項が時代を超越して存在したに違いない。

ユウェナリスが生きた時代のローマは、暴君ネロに続きウェスパシアヌス (在位79~81) によって創始されたフラウィウス朝が、ドミティアヌス (在位81~96) の恐怖政治のため倒れ、いわゆる五賢帝の輩出をみる協調的かつ平和な政治へと揺れ動いた時代であった。

一方ジョンソンが生活していたころ、すなわち名誉革命とそれから百年後に姿を現わし始めた産業革命のちょうど中間期にあたる時代は、またペ

ストの流行、ロンドンの大火（1666年）後の復興期を経て、対外的な摩擦もほとんど無かった時代でもあった。

さて、天下泰平の世の中は、悪の華が咲き正義が腐敗するのが常である。

二人の作家の共通項は、この悪徳の横行する都市生活を憂える一人の世捨て人を登場させて、当時の世の中を風刺するところに見い出されるのである。

この論文では、263行からなる『ロンドン』の中から最初の30行について、歴史、経済、社会的背景をふまえた注釈を試みてみたい。

## I

Tho Grief and Fondness in my Breast rebel,  
When injur'd THALES bids the Town farewell,  
Yet still my calmer Thoughts his Choice commend,  
I praise the Hermit, but regret the Friend,  
Resolved at length, from Vice and London far,  
To breathe in distant Fields a purer Air,  
And, fix'd on Cambria's solitary shore,  
Give to St. David one *true Briton* more.

[Stanza 1.] 友人が煩雑なロンドンを離れ、ウェールズかスコットランドの田舎にいってしまうのを、詩人が深い感慨をもって見送るところから始まる。それに対応するユウェナリスの第三風刺詩は、友人がローマの南部に位置する小さな海岸沿いの村に逃がれていくという、突然の人物設定から始まる。

両方の作品を通してみると、詩の最初と最後の数行にのみ「友人」の設定がみられ、残りの詩（ロンドンは263行、第三風刺詩は322行）の大部分は、都市の悪行を並べるとともに、社会生活への深い憂慮を述べるといった形式となっている。

1. 1. Fondness Grief and Fondness という2つの単語を組み合わせて

使用された例は、Shakespeare, Dryden, Milton などの concordance を調べてもでてこない。ジョンソンの *Dictionary* に、彼は *fondness* の定義として次の4つをあげている。1. foolishness 2. foolish tenderness 3. tender passion 4. Unreasonable liking. 強いて選べば、ここでは2番ということになるだろう。最も近い用法と考えられるのが、OED 2. Foolish affection; unreasoning tenderness 1579-80. North *Plutarch* (1670) Persons...which suffer themselves to be overcome with such passions and fondness in their mourning. ということになる。別離の悲哀を連想させる *fondness* としては、数少ない用例である。

1. 2. injured Thales Thales は、古代ギリシアの哲学者であり、天文学者であり、また幾何学者としても優れ、七賢人の一人でもあった。Thales は、ユウエナリスの Umbricius に対応する人物としてジョンソンが選んだものであるが、ただ、ここに出てくる Thales なる人物は、injured という形容詞がつけられ、やむなくロンドンを離れていく、そしてどこか名前から連想できる才気のあるイメージをもっているが、Umbricius は、ローマでの生活に嫌気がさして、ナポリの西へと自ら旅立っていくのである。では何故、injured なのか。Thales を Hawkins の言うように、ジョンソンの友人であるサヴェジ (Richard Savage) と考えてはどうだろうか。当時サヴェジは、困窮の極地におり、なおかつ放蕩な生活が続け、各方面の人々に迷惑をかけ、借金取りに追いまわされていた。そこで pope が提唱者となって金を集めて、サヴェジを Wales に都落ちさせてやろうという計画までもちあがった。しかし、Boswell によればジョンソンが『ロンドン』を出版した当時、彼はさほどサヴェジとは親しくなく、また実際にサヴェジがウェールズに出発したのは、1739年で、この詩の出版の2年後となっている<sup>(1)</sup>。もしジョンソンが、ユウエナリス自身、当時の皇帝ドミテリアヌスの怒りをかい、全財産を奪われ、ローマを追放されたという事実をふまえているのならば、モデルをサヴェジとして、彼の将来の行く末を想像するのはた易いことだと思われる。
1. 4. Hermit 隠とん者、世捨て人という意味で解されても不自然ではな

いが、18世紀中頃まで、この言葉は、たいへん宗教性を帯びたものであった。OED. *Eremit* (Hermit 1. One who has retired into solitude from religious motives; esp. one of the early christian recluses. 1667. Milton *P.L.* III. 474. *Embryo's and Idiots, Eremit and Fries.* 1799年の *Campbell Pleas* の例で、現代の語訳の意味に転じている。e.g. *The world was sad and man, the hermit, sigh'd—till woman smiled.* しかし、ここで何故ジョンソンは、*hermit* を *praise* しているのであろうか。18世紀中庸の英国ではヴォルテール (voltaire 1694-1778) らの唯理主義のめづる冷徹さが采配を揮った時代であった。そのような風潮の中で、俗世間を捨て、宗教を離れて旅立っていく友人のことを、根っからの宗教人であったジョンソンは、自分の思想とは矛盾するが、でも行かせてやりたいと思ひ、また彼自身も都会を離れ遠くにいてみたいが自分にはそれが出来ず、友人が理由はどうあれ、いけることができるので、うらやましいことであるし、立派だと思っている様子が表われている。

1. 5. *Vice and London vice* という抽象名詞と、ロンドンという地名が並列で書かれている珍しい個所であるが、ここでいうロndonは煩雑な荒廃ぶりを象徴しているのであろう。何故このような社会状況に陥ったかを、政治や経済の観点から考える前に、気候と保健衛生の面から考察する方が、よりわかり易いように思える。記録によると、1730年頃、非常に寒い冬と冷夏に見舞われ、食物の収穫が、かなり悪い状態であり、またそれに関連して、産業の流通が滞り、経済的不況をもたらしたとされている。気候の不順に供ひ、熱病の流行で、かなり高い死亡率を示している。このことが、大きな社会不安を呼んで、治安が乱れる一因ともなった<sup>(2)</sup>。

1. 7. *Cambria* 現在のウェールズ地方を指す。*Cambria* というのは、*cymry* (=Welshmen), of *cymru* (=wales) のラテン語化された言葉である。

1. 8. *St. David* (*Dewi* ウェールズ語)、ウェールズ地方の守護聖徒。彼は *Manevia* (のちに *St. David's* という地名になる) の聖職者で、そこ

に修道院を建てた。また彼は、Brefi で開かれた宗教会議において大司教司の長に選ばれている。ジョンソンは、この地を宗教性の濃い巡礼の旅の出発点と理解しているとすれば、ロンドンを去る者に、信仰の原点に戻ってほしいと願っているように思える。

true Briton ポズウェルがこの行に関して述べていることは、「アイルランドとスコットランドに対するある種の偏見および優越が感じられる。」といて軽く批判の意を表わしているが、ジョンソンは単に田舎の簡素さと都市の悪を対照させているのにすぎないと思われる。また Freeman によれば、true Briton という言葉から、同名の雑誌を暗にほめかしている<sup>(3)</sup>。この雑誌は1723～4年のわずか数カ月間発刊されたにすぎない。主宰者は品行の良からぬ Wharton 公爵で、彼は、Hell-Fire Club（向こうみずな男女からなる集まりで、1721年に当局によって活動を禁止されている）の部長をつとめ、反トーリー党、反ウォールポール派でもあったが、1729年に流刊に処された<sup>(4)</sup>。

## II

For who would leave, unbrib'd, *Hibernia's Land*,  
Or change the Rocks of *Scotland* for the *Strand*?  
There none are swept by sudden Fate away,  
But all whom Hunger spares, with Age decay:  
Here Malice, Rapine, Accident, conspire,  
And now a Rabble Rages, now a Fire;  
Their Ambush here relentless Ruffians lay,  
And here the fell Attorney prowls for Prey;  
Here falling Houses thunder on your Head,  
And here a female Atheist talks you dead.

[Stanza 2.] 第1連で友人がロンドンに別れを告げて、北の国に向かう決心をするところが紹介されたが、第二連では、見送る詩人の目を通してロンドンの荒廃の様子を、田舎の純粋な地と比較して、細かく描かれている。数行の中に社会、経済、思想の現状が実にうまく凝縮されている。第

三風刺詩でも、ローマの街がいかに危険で物騒かを表わしている。

またこの第二連で、*there* であらわされるのがウェールズ地方及びスコットランド地方を表わしているのに対し、*here* でロンドンを表わす好対称となっている。

1. 9. *unbribed Hibernia* *Hibernia* というのは、ギリシア、ローマ時代にアイルランド島の1つの呼び名であった。またこの時代の作家は、*Ierne* や (H) *iberio* など、アイルランドの名を作品の中で使っている。ジョンソン自身は、前項のところで述べた通り、アイルランドやスコットランドに対してある種の偏見をもっていた事は否めないが、その裏返しとして、まだ訪れたことのない未知の国に対してたいへん強い興味をもっていたのも、後の旅行記から考えても確かなことである<sup>(5)</sup>。
1. 10. *the Strand* ロンドンの主要街路の1つ。フリートストリート (*Fleet St.*) からチャリングクロス (*Charing Cross*) へと伸びている。元来は、シティ (*the City*) からウェストミンスター寺院を結ぶ唯一の通りであった。当時はロンドンでも最も華やかなところで、河岸沿いに王宮や邸宅が建ち並び、一方では商業や交通 (ロンドンからブリistolに向かう馬車の始発点であった。) の中心地でもあった。この時代のストランド通りの喧噪をよく表わしているのは、ホガース (*Hogarth*) の版画 (*'Enraged Musician'*, 1741) である。馬のひづめや車輪が伝わってくるようでもあり、その下敷きとなる者なども克明に描いている。乗客や荷物を載せた馬車がシティとストランドの間を往復し、夜は静寂からはほど遠いものであり、時折、夜番の時を告げる叫びが響き、朝といえば、騒音とともに始まるようなものだった。ジョンソン自身、次のように感想を述べている<sup>(6)</sup>。「最近、この通りの門をくぐりましたところ、私は悲愴な叫び声に胸をえぐられる思いをしました。それは私に、貧乏で悲しい一人の借金をかかえた男を思い起こさずにはいられませんでした。」
1. 11. *Fate* 宿命、運命と訳されるが、特にジョンソンは、宗教と結びつけて、その意味を生涯、探究している。*fate*と*free will*, *liberty*と*necessity*という言葉を用いて、そのことを深く追求している。ボズウェルが、

「人間の行動は、すべて自由意志に委ねられる。」と定義する一方、ジョンソンは、「人間の行動や自然の原理は、神の力により、予め決まっているもの (fate necessity で表わされる) で、人間の自由意志によるものではないとしている<sup>(7)</sup>。コンコードダンスによれば、ジョンソンは、fate (神の力、前もって運命づけられたという意味で) を全作品の中で、抽象名詞ではかなり多い68回という頻度で登場している<sup>(8)</sup>。

- 1.14. Fire 一般的に1666年に4日間に渡って燃え続けたというロンドン  
の大火 (the Great Fire) が連想されるが、18世紀になっても都市部での  
火災は頻繁におこり、特に1733年に起きたロンドンの火災は、その翌年  
に上京したジョンソンの記憶に新しいものと思われる<sup>(9)</sup>。またユエナ  
リスの時代のローマも都市部においての火災の発生があったことも記録  
に残っている。
1. 16. Attorney 事務弁護士、代理人。18世紀の英国において、正確に  
は、慣習法裁判所の役人の職を示している。その仕事の内容は、ジョン  
ソンが、*Dictionary* で定義しているように、「依頼人の代理として同意  
を求める場合において、注意を与えたり、お金を取りたてたりする」の  
が、主なものであった。古い時代においては、他人のかわりにあらゆる  
仕事をする人を attorney と呼んでいたが、18世紀には、法律の定める  
ものに限っていたようである。しかしこの時代には、たちの悪い代証屋  
がはびこり、お金を巻きあげたり、市民を度々脅していた。
1. 17. falling houses ジョンソンは、実在するある House を指している  
とされている。レーン女史は次のように解説している。「女性の無神論  
者が住んでいたかどうかは、わからないが、falling House は確かに存  
在していた。現在ではありふれているが、安普請の住居であったらしい。  
大風で倒れたり、雷が落ちて壊れてしまうような…。この自然現象が後  
に出てくる悪女の仕業を連想させる。」<sup>(10)</sup>
1. 18 female Atheist OED 2. One who practically denies the existence  
of a God by disregard of moral obligation to Him; a goodless man.  
1709. Shaftesberry. Character. II 2. (1737). To believe nothing of a

designing Principle or Rule of things, but Chance...is to be a perfect atheist. ここでジョンソンは、特定の人物を指しているのではないとしている。耐え難い騒々しい多弁な女性の一例を掲げているにすぎない<sup>(11)</sup>。18世紀において atheism とは、一体何であったのだろうか。Spectator (October 2. 1711) には次のような論評が載っている。「…私はこれまでに無神論者や異教徒の出現について熱を入れて話してきたが、もっと言わせてもらえれば、彼らはある種の特異な変屈の精神を持ち合わせているようなものだ。…」特にジョンソンは、女性の無神論者や、宗教家に対して、偏見を強めているばかりか、そういう人々の中にある種の魔女性を見い出しているとも考えられる。初版の Britannica (1771年版) の witchcraft の項では、「一般的には老女の魔法使いで、悪魔と契約を結んでおり、自然の摂理を変え、大風を起こすといった人間の力を越えた事をおこなう。彼女たちに立ち向かう者があれば、するどい痛みで苦しませる。このようなことが信じられていた時代には魔女裁判が法律で認められ、罪もない貧しく年老いた婦人が極刑にさらされていた。だが現在 (18世紀) では幸いにもその法律は撤廃されている。」このような記述からも想像できるように、つい最近 (18世紀初め) までは、魔女の存在が信じられ、特に女性の無神論者は、魔女と重なったイメージを持たれていた。

talk him dead OED to bring or drive (one self or another) into some specified by talking この talk him dead に相当する用例は、ほとんどこの時代にはみられないが、強いてあげるならば、次の2例に近いものと思われる。1599 Shakespeare. *Much Ado* III, 369. They would talk themselves madde. 1816. Scott Letter to Morritt, 21. August. in Lockhart, I talk them to death.

### III

While Thales waits the Wherry that contains



---

Of dissipated Wealth the small Remains,  
On *Thames's* Banks, in silent Thought we stood,  
Where Greenwich smiles upon the silver Flood:  
Struck with the Seat that gave *Diiza* Birth,  
We kneel, and kiss the consecrated Earth;  
In pleasing Dreams the blissful Age renew,  
And call *Britannia's* Glories back to view;  
Behold her Cross triumphant on the Main,  
The Guard of Commerce, and the Dread of *Spain*,  
Ere Masquerades debauch'd, Excise oppress'd,  
Or *English* Honour grew a standing Jest.

[Stanza 3.] 第3連では、友人がエリザベス女王の生誕ゆかりの地から、出発する設定で、古き良き時代の英国をなつかしみ、宮廷も政治も墮落しきっているのを、なんとかしようではないかという詩人の意図が感じられる。

この第3連では、*Britannia* と *English* の言葉の使い分けが大変興味深いものである。

1. 19. Wherry (河川用の) 広幅の帆船。ここでは、*barge* と呼ばれる船の一種であると思われる。18世紀にテムズ川 (*The Thames*) を往来していた *barge* は、平底で主に商業用の荷物を運ぶ国内便に使われた。時には装飾をほどこして人を乗せたりもしていた。構造は、*wherry* の場合、先のとがった長い主帆が一枚あるだけで、風力を応用して動いていた。
1. 21. *Thame's Banks* 18世紀当時、国内の産業発達は、テムズ川に依るところが非常に大きかった。また各地の運河の発達で *Midland* (*Oxford, Birmingham*) を通り北部 *Manchester* 付近までや、*Kennet & Avon Canal* を通って南西部の *Bristol* まで水運を使って往復することができた。それにより石炭をはじめ、鉄や土(陶器用)などの原料を各

地に運び製品を国内に運搬するのもすべて、テムズ川をはじめ水運の恩恵に預り、その発達は、その世紀の後半に花を開く産業革命へと結びついたのである<sup>(12)</sup>。

1. 22 Greenwich エリザベス女王 (Queen Elizabeth) 1533が年9月7日、London の Greenwich Palace で生まれており、ジョンソンもこの詩を書いている時、Greenwich の Castle Street の6番に下宿していた<sup>(13)</sup>。ボズウェルとジョンソンは、1963年7月30日に再びこの地を訪れており、ジョンソンは、Greenwich から眺望できるテムズ川が一番良いと確信している。その時ボズウェルは、熱をこめて、London の19行目から30行目まで朗読したとされている。
1. 25. the brissful Age 18世紀においてもエリザベス女王の存在は、女王が生きていた時と同様、英国民の永遠のヒロインであったに違いない。ジョンソン自身、18世紀の国民感情を次のように理解している。『最近とくに、この50年の間、スチュアート朝 (the House of Stuart) に対する非難や中傷が世論として高まっており、エリザベス女王の統治を望みさらにその品格を高めてきつつある。』<sup>(14)</sup>
1. 26. Britannia's Glories Britannia という言葉は、シーザーの時代、英国、特に英国南部（ローマ軍のイギリス侵略の際、最初にテムズ川南部からはじまったとされる。）を指す意味で用いられた。近代になると、特に詩の中で英国およびスコットランド、アイルランドを総称する言葉として使われた。シーザー以前には、Britannical Insulae といい、これは Albion (ブリテン島) と Ierne (アイルランド島) を総称した呼び名であった。Glory という言葉は、おそらく、スペンサー (Edmund pSencer 1522-1599) の *The Faerie Queen* という詩に出てくる Gloriana を連想させる。Gloriana というのは、栄光を象徴するもので、エリザベス女王のことを表わしている。
1. 27. Cross triumphant 前項の Gloriana と結びつけて考えてみると、*The Faerie Queen* に登場する最初の英雄である Red Cross knight ともとれはしないか。彼は神聖なるものの象徴であり、Anglican Church(英

国教会)の精神ともされている人物である。また、エリザベス I 世の象像画 (アイザック、オリヴィアの下絵でクリスパン・ド・パスの彫版なるもの。N. ヒリヤード下絵で F. デララムの彫版なるもの。及び国立肖像画廊 (National Portrait Gallery) にある作者不明の肖像画全て) に十字架が描かれているところから、これは、エリザベス女王自身を指しているものと思われる。

1. 28. **Guard of Commerce** スペンサー風の使用法であると、やはりこれもエリザベス女王を表わしているものと思われる。F.A. Yates は、*Astrea* の中でローマ神話と結びつけて解釈している<sup>(15)</sup>。「… (エリザベス女王の肖像画の) 背景にある円柱の上、彼女の右腕の後ろに、一連の円形浮彫<sup>メダイヨン</sup>がある。その九つの円形浮彫<sup>メダイヨン</sup>は、数々の小場面に、デイドーとアエネーアスの物語を語っている。その中の 1 つの商業の神メルクリウス (Mercury) も描かれている。円柱がこのように物語るのは、敬虔なるエリザベスを末裔とするブリテンの皇統に、ブルトウスを通じて連なる敬虔なるアエネーアス、すなわちトロイ人なる先祖の物語りなのである。このアエネーアスの純潔なる末裔は、デイドーとは異って (愛の凱旋に屈服して火葬壇上に身を滅ぼした。), 純潔の凱旋を成し遂げた上、純粋なる帝国の帝冠をいただいている。」ということである。この女性こそは、純粋なる帝権による宗教改革の女帝たるグロリアーナで、最終的には、エリザベス女王を連想させるものである。

**Dread of Spain** 15世紀および16世紀を通じて、スペインは、ポルトガルと並ぶ二大海軍国であった。スペイン人は、自分たちが最初の発見者であるのだからアメリカは、全部自分たちのものであると主張し、当時スペイン人という名前は非常な恐怖であった。ところが、16世紀末葉に、スペイン人のいわゆる無敵艦隊の敗北または失敗の結果として、海軍力が衰微したので、その後かれらは、もはや他のヨーロッパ諸国民の定住を妨害する力を失ってしまっていた<sup>(16)</sup>。1771年初版の *Britannica* には、スペインという国の地形的な説明のわずか数行に届まり、全く当時、英国が相手にもしていなかったことがうかがえる。

1. 29. **Excise** ジョンソンの *Dictionary* には次のように定義している。「物品にかけられて、取られる憎むべき税金。税金取り立て人から雇われた悪い連中が、その税金の率を勝手に決めている。」とかなり、当時の経済政策に不満をもっていたようである。この税金は、はじめ、アルコール類及びタバコのみにかけていたものであるが、18世紀になるとお菓子や服地、石けん、貴金属といったありとあらゆるものを対象としていた<sup>(17)</sup>。例えば1ポンドの自家製ビール用のホップに対して1ペンス。1ヤード当たりの絹や綿の服地に対して3ペンスなどである。特に税務署の役人は、酒造業者に目を光らせていたようだ。当時の金1gのレートと現在のものと比較して計算すると、物品にかかる税率は、現在ほど高くはないが、原価及び当時の貨幣価値を考慮すると、決して安いものではなく、市民にはかなりの負担になっていたようだ<sup>(18)</sup>。
1. 30. **English** 当時、英国を表わす正式名称は、**Great Britain** であって、ここでは俗称として **English** が用いられている。ジョンソンは深い思いをこめて古き良き時代の英国のことを言うときは、**Britannia** であり、18世紀当時の乱れた社会を指す場合に **English** と使い分けしている。当時の詩人 Thomson も作品の中で、英国のことを **Britannia** と書き記しており、これもやはり、16世紀の良き時代を回顧しているものである。
- standing Jest.** おきまりの冗談。昔なら、真剣に政治や社会経済のことを語り合っていたのを、今（18世紀）では、不真面目に取り扱い、英国人の誇りもすたれてきた風潮を表わしている。

## 訳

心に深い傷を負ったターレスが、この街に別れを告げようという時、私の胸を、悲しみと愛惜がかき乱すけれども、私は彼の選んだ道に、いっそう平静な心をもって賛同しよう。

世捨て人を誉めたいけれども、去り行く友は惜しまれる。ついに友は、悪徳はびこるロンドンを離れ、遠い空気の澄んだ所になってしまうのを決

---

心したようだ。カムブリアの淋しい海岸に居を構え、

セントディビッドの地に一人の生粋のブリトン人をつけ加えるために。

賄賂でもくれない限り、だれが、ヒバニアの地を離れる者があるのか。  
スコットランドの岩場を誰が煩雑なストランド通と交換とするものか。

君の行く遠い所では、突然の運命で命を奪われることなどないだろう。  
飢死を免かれた者はただ年老いて死んでいく。

しかし、ここロンドンでは、悪意と強奪と事故が共謀し、今や暴徒が荒れ狂い、火災には見舞われ、無慈悲な悪漢どもが、陰で待ち伏せをしている。そして残忍な弁護士は餌食を求めてさまよい歩く。家が音をたてて頭上に倒れかかり、女の無神論者は、死を告げる。

使い果たした財産の残りわずかを、テムズ河岸につけた船に積む脇で、われわれ二人は、だまって立った。そこではグリニッチが、銀色にさざめく流れにはほえみかける。エリザベス女王に生を与えた土地に感動し、われわれ二人はひざまづいて、聖別の地に口づけする楽しい夢の中にあの祝福された時代を再びよみがえらせ、ブリタニアの栄光を呼び戻そうではないか。

大海におけるエリザベス女王の大勝利の十字架を見よう。商業の守護者でスペインの恐怖であったものを。今や仮面舞踏会は墮落の一途を走り税金は、不当の圧迫を加えているではないか。

さもなければ、英国の名誉と栄光が今や、たわいもない冗談に成り下がっているではないか。

#### 注

- (1) Boswell, J. *Life of Johnson*, The World's Classics. Oxford University Press, 1953, 1980 (Third Printing).
- (2) George M.D. "Life and Death in London," *London Life in the Eighteenth*

- Century, Penguin books. 1925, 1979 (The fourth Printing).
- (3) Freeman J.D., (ed.) *Samuel Johnson the Complete English Poems*. Yale University Press. 1982.
  - (4) *New Century Cyclopaedia of Names*. Prentice—Hall, Inc., 1954.
  - (5) Chapman, R.W. (ed), *Johnson's Journey to the Western Islands of Scotland and Boswell's Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson*. Oxford University Press, 1924, 1974 (Third Printing).
  - (6) The Idler, No. 22. September 16, 1758.
  - (7) Life of Johnson.
  - (8) Naugle H.H. *A Concordance to the Poems of Samuel Johnson* Cornell University Press. 1973.
  - (9) *London Life in the Eighteenth Century*.
  - (10) Lane. M. *Samuel Johnson and his world*.
  - (11) *Samuel Johnson, the Complete English Poems*.
  - (12) Turberville A.S. (ed). *Johnson's England, An Account of the Life and Manners of his Age* Clarendon Press. 1933.
  - (13) *Samuel Johnson the Complete English Poems*.
  - (14) 1760 An Address of the Painters to George III, on his Accusation to the Thorne of these Kingdoms の節より。
  - (15) Yates. F.A. *Astraea, The Imperial Theme in the Sixteenth Century*. Penguin Books. 西澤龍生, 正木晃訳 「星の処女神 エリザベス女王 十六世紀における帝国の主題」 東海大学出版会 1982年
  - (16) アダム・スミス著「諸国民の富」 岩波文庫
  - (17) Sir Robert Walpole's defence of his Excise Bill, 1733, English Historical Documents vol. V. 1714—1703 Eyre & Spottiswoode. 1969.
  - (18) 「諸国民の富」 金1オンスのレートを参照。

TEXT

- “London” The Poems of Samuel Johnson. Oxford University Press. 1974.
- “The Third Satire” Juvenal and Persius. Loeb Classical Library, Harvard University Press. 1979.